

平成 30 年度

事業所名 : グループホームじゅあんの園(あじさい棟)

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0391500204		
法人名	社会福祉法人奥州市社会福祉協議会		
事業所名	グループホームじゅあんの園(あじさい棟)		
所在地	岩手県奥州市胆沢南都田字石行30-1		
自己評価作成日	平成30年11月14日	評価結果市町村受理日	平成31年2月5日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kai.gokensaku.mhl.w.go.jp/03/1/index.php?action_kouhyou_detail_2017_022_kani=tr ue&li_gvovyoCd=0391500204-00&Pr_efCd=03&Ver_sj_onCd=02
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会
所在地	〒020-0871 岩手県盛岡市中ノ橋通二丁目4番16号
訪問調査日	平成30年11月28日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

明るくゆったりとした施設の中で、利用者様が自分を自由に表現できる雰囲気、利用者様、職員が笑顔の日々を送れるような施設を目指しています。外出行事や季節行事をおして「今」を感じることを大切に過ごしていただいています。夏祭りや敬老会、じゅあん喫茶などイベントも企画し、近隣住民やボランティア団体、ご家族、運営推進委員に参加いただき、一緒に楽しい時間を共有する等繋がりを大事にしています。また、消防訓練でも地域の皆さんに協力を頂いており、災害時の対応でも心強く過ごすことが出来ています。他施設行事(発表会等)や保育園行事(運動会等)に積極的に出かけ利用者様が地域と交流しながら楽しく過ごせるよう支援しています。利用者様の希望を反映し、外食や弁当持参のドライブを楽しむなど自然と接する機会を積極的に設けています。今年は地元の工場見学に出掛け地域との一体感も感じる事が出来ました。訪問診療や訪問歯科の利用など医療との連携を図ることで、利用者様・ご家族から安心してこの施設に入所して良かったと思えるよう創意工夫をしています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

2ユニットにデイサービス施設が併設された事業所で、市の総合支所を始め、教育、文化、スポーツ、福祉、医療等の公共施設が集中するエリアに位置し、地域住民が集まりやすいことから、地域やボランティアの方々の来訪も多く、地域との交流が積極的に行われている。一方のユニットでは、自主性を尊重し、夕食を除き、自分の好きな時間に食事を取るといったフリースタイルを取り入れたりと、また、一方は、皆と一緒に活動する生活を基本にするなど、ユニット毎に、利用者の状況に合わせ特徴のある支援を行っている。本年度、職員の総意で運営の基本方針を「一日十笑」と定め、「笑顔」をキーワードに一人一人の支援にあたっている。また、今後は看取りへの対応も想定されることから、医療連携の体制を整え、職員のターミナルケア研修に力を入れるなど、意欲的に運営改善等に取り組んでいる。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない			

平成 30 年度

事業所名 : グループホームじゅあんの園(あじさい棟)

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	奥州市社協介護サービス事業の基本理念に沿って、日々の業務に取り組んでいる。自分達の目指す方向性について検討し、独自の理念を実践中である。	運営主体の理念や基本方針をもとに、本年度、ホーム独自の基本方針を職員から募集したところ、笑顔をキーワードにしたものが多かったことから「一日十笑」とした。ありのままの笑顔でわが家のような暮らしを利用者と職員で築いて行けるよう取り組み始めている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	施設の行事のご案内を出し地域の方にもしていただいている。又地域や学校の行事には参加して相互の交流をしている。	公共施設が集中する地域の中心地に位置し、近くの図書館や文化創造センターの催事に出掛けている。中学校の運動会や保育園の発表会に招待を受け、子ども達と交流している。法人主催で毎月開催している「じゅあん喫茶」には、近隣の方や地域のボランティアの方にも参加してもらい、利用者と交流、談笑してもらっている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	施設見学の受入や、職員が認知症キャラバンメイトのボランティア参加するなど交流を図っている。近隣の方にも自由にきていただき、相談できる環境となっている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	施設運営や地域交流、防災関係等について意見をいただき、その後職員会議等に提案しサービスに反映できるように努めている。運営推進委員より頂いた意見で投薬マニュアルを見直し投薬事故を減らすことが出来た。家族への近況報告手紙は継続して行っている。	行政や福祉関係者等、地域の多様な方々で構成され、ホームの運営や活動の報告をもとに、意見交換を行っている。自然災害等への対応、介護職員等人材確保の課題等に意見をいただいている。	デイサービスセンターと合同で開催しているが、開催について要件があることから、開催方法について、市の担当課と相談、協議することが望まれる。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議の委員として行政の方にも協力を得ており、会議等でも助言をいただいている。運営、制度上不明点、事故報告等については、その都度、電話やその都度出向き、安全なサービス提供にむけて、助言ももらっている。	運営推進会議で行政の立場から意見等を貰っている。制度上必要な手続きや連絡にあたっては、担当課を直接訪問するようにしている。介護相談員や生活保護ケースワーカーの訪問もあり、行政との連携は円滑に行われている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	利用者一人ひとりの生活を把握し、申し送りや業務日誌に記入することで全職員で確認し身体拘束を行わないケアに取り組んでいる。防犯予防として、夜間19:00～早朝6:30までは玄関の施錠を行っている。転倒予防に、センサーマット、体調確認のため介護ロボットを家族の同意の元使用し安全を図っている。	法人で身体拘束防止のためのマニュアルを作成し、定期的に研修を行うなど、身体拘束のないケアに取り組んでいる。現在、対象になる利用者はいないが、あじさい棟では、家族の同意を得て、転倒予防にセンサーマットを使用し、また、就寝中、心拍等に変化があったり、覚醒した場合に反応する介護ロボットを利用している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	外部研修に参加したり事業所全体で虐待について研修会をしている。日々の生活の場面を振り返り、報告・相談できる環境を常に意識している。虐待行為について常に見え位置に掲示し全職員で把握している。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	1名の利用者が利用しており、本人、ご家族、関係機関と連携を図りながら対応している。今後については、全職員が対応できるよう実際の利用中の事例を参考に理解が深まっている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時に、利用者、家族に説明を行い同意を得ている。不明な点についてはその都度説明を行っている。解約時も同様である。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	毎月のお便りや家族来所時に生活の様子についてお伝えしている。その際、要望や意見等をうかがい、職員で共有し迅速な対応をするよう申し送りノートなどに記載し改善に努めている。第三者委員を設置し、相談できる窓口を設けている。	2ヵ月毎に発行する広報紙に加え、毎月、スナップ写真を添えたお便りを利用者個々に送り、家族との連携に努めている。通院同行で来所した際などには、家族から意見、要望などを聞くようにしている。利用者からは、外出の希望が多く、心身の状況を見ながら、可能な限り対応するようにしている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	随時・定期で職員の意見を聞く機会を設けている。また、日々相談しやすい環境をつくっているが、職員の処遇について話合う機会が少ない状況であった。今年は勤務の見直しにより行事対応時間帯を手厚くしたことで結果話し合いをする時間も増えた。	管理者は、毎月のユニット合同の職員会議やケアプランの評価会議の際に、職員の要望を確認している。職員から日中の特定時間帯の勤務体制の見直しが提案され、改善を行った。また、寒暖の差が激しい居室があり、エアコン設置の要望が出され、予算化に向け検討している。総括施設長が、年1回、職員と個別面談の機会を設け、メンタルヘルスも含め、話し合っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	正職員への登用制度を確立している。資格取得時、職専免や年次を利用して研修に参加できるよう配慮している。職員不足により、年次休暇が取れにくい環境にあるが、来年度の制度改正に対応できるよう検討中である。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	研修会への参加や資格取得へ向けての講習会への参加も積極的に行いキャリアアップできる環境整備ができています。研修参加後は研修の復命として報告の場を設けるようしている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	協会へ加入し、研修会や集いの場へ積極的に参加している。また、交換研修も行い、他事業所、他職種と情報交換も行って介護サービスの質の向上へつなげるきっかけ作りができた。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入所前から利用者本人や環境についてのアセスメントを可能な限り詳しく行い、入所してからの混乱が最小限になるよう本人・家族と連携している。また、担当制にすることにより、職員との信頼関係をよりスムーズに築けるよう配慮している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	不安な点は、すぐに確認ができるように連絡先を明示している。全職員が対応できるように、フェイスシート等で情報の共有を図って信頼関係の構築に努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入所1ヶ月は本人のニーズ把握のためのプランに基づきサービス提供を行い、細やかな観察を行って家族との連絡も緊密に行っている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	家事はそれぞれができる事を分担して行っている。自らが得意な事を活かし、職員も教えていただく姿勢で接している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	本人、家族の要望を聞きながら、積極的に意見を話せる雰囲気を作り、担当職員を決めることで、より話しやすい環境を作っている。家族も本人も安心してホームで過ごす事が出来ている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	家族や親戚だけに限らず、友人や地域の方も気軽に面会に来所されている。面談室や新聞コーナー、居室を活用されている。近隣にチラシを配り夏祭りには多くの例年より多くの方が来所され交流を図った	ホームの生活の中で、柿や野菜を収穫体験させてくれる近くの農家の方や来訪してくれる傾聴ボランティアの方々と馴染みの関係になっている。買い物やふるさと訪問など、旧知の人と再会出来る機会を増やしたいとしている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	座席を決めずに、本人の好きなところに座っていただいている。また、ソファを設置することにより、利用者が自然に会話できるようになっている。交流が苦手な利用者に対しては職員が入ることで支障なく過ごすことが出来ている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退所後もそれぞれのケースに応じて、家族の心配事や適切なサービスが受けられるようにアドバイスをを行っている。必要に応じて気軽に連絡がとれる事を退所時に伝えている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日常の会話の中から、入浴、食事、余暇活動等に対する希望や要望がないか確認をしている。要望について、職員全員で検討し改善に努めている。	ゆきつばき棟は、自分の意向や要望をはっきり言える利用者が多く、やりたいこと、取り組みたいことを把握し、ケアプランに入れて支援している。あじさい棟は、自分からは話をしない人が多く、表情から思いを汲み取りながら会話が弾むよう努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	生活歴を職員が把握することにより、趣味や馴染みのものと生活ができるように努めている。毎月の評価会議において利用者の状態の把握に努め情報共有を図っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	支援経過や業務日誌、申し送りノートに利用者の心身状況や様子、会話などを記入し情報共有を図る事により現状を把握する事ができている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	月1回の評価会議において、担当職員のモニタリングを含め各職員からケアの見直しやあり方について意見交換を行っている。本人や家族から出された要望や意見についてもプランに反映していくことでニーズの充足に努めている。	担当職員のモニタリング資料をもとに、毎月の評価会議でケアプランの評価を行いながら、随時、又は3か月ないしは6か月毎に計画作成担当者が、継続、見直しを検討し、家族の意向も確認したうえで、ケアプランを作成している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	気づきや工夫は、支援経過の特記事項の活用、また、業務日誌で申し送る事により情報共有を図る事が出来ている。評価会議等で利用者の現状を話し合い、介護計画に反映している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	日々の会話や行動からニーズを推し量りながら生活に活かすように心掛けている。季節行事や近隣施設で開催される様々な行事や発表会等に参加し、地域の旬な活動を体験することを大切に活動している。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	月1回の傾聴ボランティアの受入れにより、会話を楽しまれたり、近隣農家から招待され時期の野菜と一緒に収穫をして季節や旬の作物を感じる事が出来た。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	提携医療機関の訪問診療や訪問歯科診療を受ける利用者があり、家族からも安心の声が聞かれている。かかりつけ医の受診は家族対応。体調不良者や車いす利用者に対しては、希望があれば可能な限り職員が病院まで送迎している。随時体調についての連絡や報告を看護師が行っている。	市の国保診療所や個々のかかりつけ医に家族同行で定期通院しているが、車椅子使用者は職員が送迎している。バイタルチェック表等のデータを家族に持ってもらっている。内科、歯科とも診療所と訪問診療の契約をしており、往診が必要な時にはすぐ対応してもらえる。看護師が配属されており、適切な健康管理を行っている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	介護職の気づきを看護職に報告している。専門的分野からアドバイスをいただき家族と連携しながら適切な介護、受診に繋げる事ができている。昨年の年末～今年年始にかけ体調不良の方には、病院と連携し訪問看護で毎日点滴を受けることが出来た。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	安心した治療のため、看護職から医師や看護師に利用者の体調や薬剤の情報提供を行っている。退院時はカンファレンス等により状態や注意点を確認し、退院後快適かつ安全に生活ができるように職員に周知・対応に努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	現在取り組みは行っていないが、終末期ケアの必要性はあると実感している。今後については実行に向け随時研修参加や職員のスキルアップに努めているが、利用者・家族ともよく相談しながら進めていきたい	家族に対して、利用開始時に、重度化、終末期に至った時は、病院や他の施設での対応になることを説明しているが、国保診療所医師や訪問看護師による医療連携は可能な状況にあり、職員研修に力を入れるなど、看取りを実施出来る体制を整えたいとしている。	医療連携体制や両ユニットの協力体制等を明確にしたうえで「重度化・看取り指針」を作成し、看取りのスキル研修のみならず、死生観の共有など、メンタル面での職員間の共通認識を深める取り組みを期待したい。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	運営推進委員である消防機関の協力を得て、救命講習会を開催し、利用者の急変や事故発生時の対応、AEDの使用について学んだ。今後も継続し、緊急時慌てず行動できるよう資質向上に努めたい。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	夜間火災、昼火災の設定で年2回避難訓練を行っている。訓練には地域の方の参加もいただき一緒に避難経路の確認をおこなう事ができた。災害時の対応についても運営推進会議でも意見頂いたり情報の交換をしている	年2回、隣接の消防署分署立ち会いで定期の火災避難訓練を実施している。近隣の方々に協力員をお願いし、揃いのジャンパーで参加してもらっている。地域と連携した災害時の対応について、運営推進会議のテーマとして毎回のように話し合っている。定期の訓練だけでは不足するので、ユニット間の連携も含め、毎月、継続的に避難訓練を行うようにしたいとしている。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	言葉かけをはじめとした介護全般について、常に温かい気持ちで敬意をもって接するように心がけている。また、家庭的な雰囲気のあるユーモアあふれる会話も日常的に大切に利用者様が笑顔で過ごせることも心掛けている。	自分の思いや考えで行動する人が多く、プライバシーを傷つけないよう配慮しながら、本年度定めたホームの基本方針である“笑顔”で暮らせるよう、本人のやりたいこと、得意なことなどに取り組んでもらうよう支援している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	利用者個々の好みの活動を重視して生活できるような雰囲気作りをし、希望に応えることが出来るように物品を準備している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	利用者一人ひとりのペースに合わせ、安全に留意しながら生活できるよう支援している。入浴時間など職員が手薄な時間帯など希望に添えない時もあるが、何時であれば可能かはっきり伝えることで、理解を得ている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	整容や着替え等、自分で選ぶことを基本とし、自己決定を支援している。本人・家族から理髪の依頼があった際には近所の理髪店に出張して頂いている。月1回ボランティアによるハンドマッサージにて心身の癒しも頂いている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	日常会話の中で好きな食べ物や食べたいものを聞きながらメニューに取り入れている。施設の畑で野菜を育て一緒に収穫し獲れた野菜を調理し季節野菜を味わったり郷土料理を調理していただく事もある。	ユニット毎に職員が交代で献立を作成、調理を行っている。ゆきつばき棟では、週2回の買い出しに同行する利用者もいる。配膳から食事、後始末まで自分で好きなように行うフリースタイルにしたところ、台所に入って調理を行う人が増えた。あじさい棟では、3分の1位の人が盛り付けや後片付けを手伝っている。郷土料理等、利用者の要望に沿ったメニューを工夫し、楽しい食事になるよう努めている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	好みやアレルギーに配慮し、個別にメニュー変更をすることもある。疾患・体調等に合わせた水分摂取を心掛けている。支援経過や排泄チェック表を記載し全職員が利用者の食事や水分量を把握できるようにしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、利用者毎の状態にあわせて声掛け見守り、介助にてブラッシング、うがいをやっている。夜間は必要者に合わせて義歯を預かり洗浄し、清潔が保たれている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	支援経過にて1日のパターンを把握し、トイレ誘導している。オムツ利用者や歩行困難者でも残存機能を活かし、自立した排泄が保てるように誘導・介助している。	日中は、利用者全員がトイレで排泄している。ゆきつばき棟の人は、多くが布パンツ又はリハビリパンツを使用し、自分でトイレに立つ人が多い。あじさい棟は、全介助の人も含め、介助の割合が高くなってきている。排泄の自立に向け、また現状を維持できるよう支援に努めている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	便通が良くなるように繊維野菜や果物をたっぷりと摂取できるようにメニューを考案している。また、身体を適度に動かすことも定期的に行っている。医療面では看護職と相談しながら予防したり早い対応が出来るよう行っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	個浴でゆっくり入っていただき、入浴を楽しみにされている。曜日は決めているものの、外出や行事、体調不良時等に対して臨機応変に対応している。	週2回、午後の入浴になっている。夏場は、週3回に増やしている。ゆきつばき棟は、見守り中心の人が半数近くいるが、あじさい棟は、殆どの人が何らかの介助が必要になっている。時間をかけて入浴を楽しんでもらうよう配慮している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	居室にはベッドの準備はしてあるが、希望や身体状況に合わせ、持ち込みの手作り布団やマッドなど好みの寝具で安心した休息が取れるようにしている。又、共有スペースでも疲れたらすぐ休めるようソファを設置している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	利用者の処方箋を綴りにして常に目的や副作用を確認できるよう整備している。誤薬事故防止のため3重のチェックを行っている。個々の内服状態を把握し確実に内服することが出来るよう看護職と相談しながら提供している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	役割として家でも行っていた家事はいつでもできるようになっているのでいきいきとした生活に繋がっている。楽しみとしては利用者毎の好みや趣味に応じた活動を心掛け、本を準備したりテレビ番組を録画する、塗り絵や箱作り等思い思いに取り組むことが出来るようにしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	家族の協力も得て、家族と一緒に外出される事は本人の要望で自由に行うことが出来るようになってきている。弁当持参で外出し昼食をとる事もある。天気の良い日は、散歩に出かけたり、むかひの図書館や近くの施設に出向き気分転換を図っている。食材の買い物に同行して買い物をする事もある。	近隣には、敷地の広い公共施設等があり、散歩コースには事欠かない。グループで職員と散策している。収穫体験をさせてもらっている農家まで出掛け、自然を満喫することもある。四季のドライブや外食に出掛ける機会を出来るだけ多くつくるようにしており、家族の誘いで外出し、外で食事を取る人もいる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	個人の現金所持は現在は所持する人はいない。外出して必要なものを自分で選び購入する喜びも普通に感じていただきたいことから、今年は近所にパンを購入に出掛けた。今後はそのような機会を増やしていきたいと考えている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族の都合も考慮しながら、本人から要望があれば、施設内の電話を利用し家族と話ができるような環境にしている。手紙については現在やり取りしている人がいない。(面会に来所される)		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	施設内は白い壁なので、利用者と一緒に春夏秋冬を感じる事ができるような装飾制作を心掛けている。廊下や居室には利用者が作成した作品や行事の写真を貼ることにより、思い出の提供にもなっている。個人が楽しむことができるよう和室や図書コーナーも準備している。	玄関正面を入るとあじさい棟のホールがあり、共用の事務室を境にゆきつばき棟の入口がある。ゆきつばき棟は、ホールと廊下が一体化している。また、畳敷きのコーナーがあり、あじさい棟はフラット、ゆきつばき棟は腰掛けられる高さになっており、それぞれ利用者に有効活用されている。両ユニットとも、ホールや廊下の壁に利用者手作りの大きなパッチワークや暖簾、塗り絵等が飾られ、アットホームな雰囲気のあるホールになっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	食事用のテーブルは座席自由で、話の内容やその時のメンバーが話しやすい場所に座って楽しんでいる。他にもソファーや新聞コーナーなど、また椅子を移動して日向ぼっこするなどその時々楽しみをもって過ごせるようにしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	本人馴染みのものを飾ったり、本人愛用の寝具を使用、馴染みの家具等持ち込んでいただく等、家庭と変わらない雰囲気の中で生活できるようにしている。	ベッド、タンス、洗面台が設置されている。布団を持ち込み、床に敷いて和式で休んでいる人もいる。家族写真、テレビ、使い慣れた椅子や小物類を持ち込み、自分好みの居室づくりをしている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	新しく入所された方に、居室やトイレが分かりやすいように、入口に名前を掲示している。確認しながら自分の居室に戻られたり、トイレに行けるなど安心して生活できるように心掛けている。		